

# 佐賀県武雄市朝日町方言の 比喩語について

井上博文

はじめに

1. 調査対象地：武雄市は、佐賀県の西部（ニシメ）に位置し、主産業は稲作を中心とした農業であり、また武雄温泉でも有名である。朝日町はかつての長崎街道沿いに広がり、そのなかの高橋地区は六角川を介して有明海への水運の要地として賑わった。
2. 調査年月日：平成5年1月12日（14:00～17:30）
3. 教示者：橋口俊視氏（m.S.4）<sup>a</sup>、橋口妙子氏（f.S.8）（元）公務員
4. 調査者・調査場所 井上博文・教示者宅
5. 調査方法・調査時の様子：配布の調査票に基づく面接調査。雑談をまじえつつ、くつろいだ雰囲気の中で行う。補いとして、志津田藤四郎『佐賀の方言 上巻』（1970. 佐賀新聞社）所収の比喩語を提示し使用の有無を確かめた。  
（注、「男性で昭和4年生まれ」であることも表す。女性は「f」で示す。）

## I. 自然現象

- 1 日照り雨 キツネノヨメイリ（狐の嫁入り）、テーアメ（照り雨）
- 2 入道雲 ニュードーグモ（入道雲）
- 3 旋風 ウズマキ、ツムジガジエ
- 4 霜柱 シモバシラ
- 5 つらら ツララ
- 6 北斗七星 ナナツボシ（七つ星） 七つの星が並んでいるから。
- 7 昴 特定の言い方はない。
- 8 流れ星 ナガレボシ

## II. 動物

- 9 かわはぎ 魚を知らない。
- 10 ひらめ ヒラメ
- 11 ひきがえる ドンコビッキ 大きくて動きが鈍い。かけっこなどでびりのことをドンボチ・ドンコ・ドンボと言う。ビッキは蛙の総称。蛙はビッキタン。
- 12 青大将 エーグチナワ（家くちなわ） 家にいるから。オーグチナワ（大くちなわ）とも。大きな蛇だから。クチナワは蛇の総称。口のある細だから。
- 13 とかげ トワダ
- 14 かまきり チョーランミャー（～舞い）、カマキリ
- 15 みずすまし ミズスマシ
- 16 きつつき キツツキ
- 17 せきれい シタタキ・ヒタタキ 「火叩き」か。また、「シリタタキ（尻叩き）」の転訛か。
- 18 ふくろう ドーコー、カネツキドーコー（鐘撞きどうこう） 鳴声から。ホースゲとも言う。

## III. 植物

- 19 馬鈴薯 ジャガイモ

- 20 とうもろこし トーキビ (唐黍)
- 21 いんげん豆 コッチャマメ 実がたくさんなつちぎるのがたいへんだから。  
○チ「ギート」ニ コツ「チャウツケン ガ」ー。(m. S. 4) ショクシヨマヌ (食傷豆) とも。食べても食べても実がなるから。ヤシヤマヌ (野菜豆) 実ばかりでなく、サヤナガラ (鞘のまま) 食べるから。
- 22 そら豆 トンマヌ 唐豆?
- 23 木くらげ ミミナバ (耳なば) 耳の形に似ているから。
- 24 げんのしょうこ イシャダオシ (医者倒し) 万病に効く。○ヤツ「バ マン「ピョーニ キクト」 ヨ「ネ」。コレガ「ネ」。ソイケン オイシャサンニ イ「カンデモ ナ「ンデン ヨク「ナルチュフ」ナ。(f. S. 8)
- 25 どくだみ ドクダミ・ドクダヌ
- 26 いたどり イタドリ
- 27 からすうり インゴイゴイ (犬胡瓜胡瓜) イヌ (犬) が付いたものは、格が落ちる。イヌツゲ (→ホンツゲ)、イヌザンシヨ (→ホンザンシヨ)
- 28 すみれ スミレ
- 29 春蘭 シュンラン
- 30 母子草 ハハコグサ
- 31 ねむの木 N. R.

#### IV. 性向

- 32 熱しやすく冷めやすい人 ミツ万ボーズ (三日坊主)
- 33 あわてん坊 オッチョコチヨイ
- 34 動作の鈍人 コツテウシーンゴター (牡牛のようだ) オトコウジは、動作がノツソアツソシトル (のっそりのっそりしている) から。
- 35 嘘つき センミツサン (千三つさん) 千に三つしか真実がないから。  
○セ「ンニ 「ミツ」ツシカ ホンナコト イ「ンシャラン。(m. S. 4) 千三つしか本物のことを言わない。
- 36 ほらふき オープロシキ (大風呂敷)、「カガイチートカンギ フキトバサル (つかまっていなくて吹き飛ばされる)」 ○ア「ン ヒトンハナ「シャ カ「ガイチートカンパン」 モン「ネ」。コガン「トコ」ニ カ「ガイチートカン」ギ フキトバサル」ーテ。ウ「ソツキンサツ」チュゴタツ フー「ネ」。(f. S. 8) あの人の説きまわらないといけぬものね。こんなところにはつかまっていなくて吹き飛ばされると、驚かされるということね。
- 37 おしゃべり アゴ (顎)、アゴガキート (顎が効いている)、アゴベンゲー (顎弁慶) ○アノ ヒトワ「ー ア「ゴジャ モン。(m. S. 4) あの人はしゃべりだもの。クチンタツシャカ (口が達者だ)、チャンペラ あっちこっち言い回る人。
- 38 冗談言い ヒョーキンモノ (剽軽者)、ヒョーグツ<動>、ヒョーグモン
- 39 口先だけの人 シーラアゴ・シーラアギ 言わないでもいいようなことを言う人。粉の入っていないものをシーラと言う。エートコシー・エートコシ  
○ニ「クマレグチ ユワンデ ヨ「カ コトバ ユー。エ「ーコトシージャ モ」ン。(f. S. 8) 口先だけのことばかり言う、エーコシーだもの。タイヘイラク (太平楽) 口先だけで大きなことを言う人。
- 40 とんちんかんなことを言う人 特にない。
- 41 のらりくらり煮えきらない人 ドンジョーンゴタ (泥鰌のようだ)  
○ド「ジョー」トユートノ ニョ「ローニョ」ロ スット「ノ。ヌ「ラーヌ」ラリ

- スル。(f. S. 8) 難とあるので、こぼれこぼれるが、ぬりぬりする。
- 42 怒りっぽい人 カンカンボツボ 怒っているさまの形容。
- 43 気むらな人 ヒヨリモン、オデンキヤ
- 44 泣き虫 ナキビス・ナキベツ
- 45 おてんば娘 オトコテンバ、オチテン、オトコマサリ
- 46 腕白坊主 アマイゴロー アマは猫などがじゃれるようにさわぐこと。  
 ○ポー<sup>1</sup> モッテ オッ<sup>1</sup>カケ<sup>1</sup>テ マ<sup>1</sup>ワールヨー<sup>1</sup>ナ オトコノコ  
 コトオ<sup>1</sup>「ネ」。ア<sup>1</sup>マイゴロテ。(f. S. 8) 難を持って廻転てまわるような男の子を、アマイゴと(語)。
- 47 出しゃばり デベツ、デシャバイ (でしゃばり)
- 48 どこへでも顔を出す人 デベツ、タカトバタ (高とうばた) いつもとび歩いているような人。トバタは扇。
- 49 家にこもって外出しない人 ハンズガヌ、ハンドカブリ 水瓶は家の中にあつて外に出ないから。○オ<sup>1</sup>クサンノ メッ<sup>1</sup>タ<sup>1</sup>ニ デンデ。ハ<sup>1</sup>ンズガメノ ヒ<sup>1</sup>サシブリ ズッ<sup>1</sup>ケ。(f. S. 8) 奥さんがめったに(外に)出て、瓶が久ぶりに出るから。
- 50 小心者 ノミフキンタマ (蚤の金玉)
- 51 内弁慶 イシガキドンポー 恥ずかしがり屋。ドンポー (魚の一種) は石垣の中において人が来るとすぐ隠れるから。
- 52 人づきあいをしない人、社交性のない人 ハンズガヌ
- 53 妻に対して頭の上がらない男 キヤーフカバイ (きヤーふ被り) キヤーフは腰巻きのこと。カカーデンカ、シカレトンサツ
- 54 けち 三ギリ (握り)、キンチャクノヒモノ カタカ (巾着の紐が堅い) テチ
- 55 欲張り ヨクタレ、ヨクノカワノ ツッパトツ (欲の皮が突っ張っている)

## V. 食生活

- 56 大食漢 イッショウガイ (一升食い)、ウーメシグリヤ (大飯食らい)
- 57 ばたもち ボタモチ
- 58 砂糖味が薄い サトヤントカ (砂糖屋の遠い) 反義語は、アマダルカ。
- 59 塩味が薄い サビナカ 反義語は、シオンヒャーカ・シオヒャーカ
- 60 大酒飲み イッショードツクイ (一升徳利) たくさん飲むということ。昔は瓶ではなく徳利だった。エイクリヤー・エークリヤー (酔い食らい)
- 61 酒に酔ってくだをまく サケグセンワルカ (酒癖が悪い)
- 62 酒に酔って顔が赤くなる、そのさま カジバミチャー (火事場見舞い)  
エビカニンゴト (海・老蟹のように) 海老や蟹は、茹でると赤くなるから。働いた後に上気して顔が赤くなることにも言う。

## VI. 動作・様態

- 63 恥ずかしくて顔が赤くなる、そのさま ホテツ (火照る) <動>
- 64 どしゃ降りの雨 ダーダブスツ (ざあざあ降りする) <動>
- 65 ずぶ濡れ・びしょ濡れになる、そのさま  
ビッシュユイナルツ (びっしょり濡れる) <動>
- 66 服装がだらしないさま ズンダレ
- 67 髭がのび放題なさま 特にない。
- 68 厚化粧をしている人 カベヌッテル (壁を塗っている) 壁を塗るように厚く塗っているから。コテヌイシトンサツ (鍍塗りしておられる) 鍍で塗ったように厚

- く塗っているから。
- 69 背丈の高い人 ノッポ、トーボシゴト シトツ (案山子のようにしている)  
トーボシは案山子のこと。
- 70 出びたい デコ、タンチョーデコ 前後ともデコ。タンチョーは両方で打てる金槌、前後に出っ張っているから。「マエデコ (前デコ)、ウシロデコ (後デコ)、タンチョーデコ」と囁す。
- 71 汗がひたいから流れ落ちる タキンゴト スツ (滝のように出る)
- 72 目を丸くする チョコンゴト シテ (猪口のようにして)
- 73 口をとがらす トンガラス・トガラス<動>
- 74 焦げ臭いにおい コガレクサカー
- 75 遠回り (をやる) トマワイスツ (遠回りする) <動>
- 76 末っ子 オトボ 男の子はオトボオトゴ、女の子はオトボームヌ
- 77 一生懸命頑張る ジゴズゴト (内臓が出るように) ジゴは内臓のこと。ちなみに、魚の内臓はサカナンジゴと言う。

## VII. 調査票以外のもの

### (1) 自然現象

- 78 ジューバコテンキ (重箱天気) ころころと移り変りの早い天気。

### (2) 動物

- 79 クソガメ (糞蟹) 有明海にいる蟹の一種。食べてもあまり旨くない。
- 80 オニヘンボ (鬼へんぼ) 鬼やんま。ヘンボは蜻蛉の総称。
- 81 ガネブーブ・ガンガンブー (金ぶうぶ・金金ぶう) こがね虫。ブーは羽音の擬音。
- 82 キンゴブ (金こぶ) 黄金蜘蛛。
- 83 キッチョ きりぎりす 鳴声から。
- 84 アヌガタ (蛤がた) あめんぼ。あめんぼは触るとアヌガタのようにべたべたするから。
- 85 スーズーショ つくつくぼうし。鳴き声から。
- 86 カベトーシ (壁通し) やもり 壁にへばりついているさまから。
- 87 イモリヤー (芋洗い?)、アガハラ (赤腹) いもり 腹が赤いから。
- 88 カラスギヤー (烏貝) カラス貝 黒いから。
- 89 スズメギヤー (雀貝) 蜷 小さいから。
- 90 ゴツカブイ (ご器かぶり) ゴキブリ。
- 91 ワラスボ (蕪すぼ) 魚の一種。細長い体型をワラスボに譬えた。
- 92 ツバサウオ (翼魚) 飛び魚。ツバサは燕のこと。

### (3) 植物

- 93 カシウイ (菓子瓜) まくわ瓜。菓子のように甘いから。ヤサイウイ (野菜瓜) は生で食べないで漬物にして食べる。
- 94 ガネブドー (蟹ぶどう) 野葡萄。小さい蟹が寄り集まっているさまに見立てたものか。
- 95 手ジマメ (雉子豆) うずらいんげん。斑点の模様から。
- 96 ガラガラグサ (がらがら草) 草の一種。振った時に音がする。ガラガラは擬音。
- 97 スズメフデッポ (雀の鉄砲) 草の一種。さやに入った小さな実がなる。さやの

中の実を取り出して、細工をして口に含んでびいびいと鳴らす。

- 98 トツテコッコ (一) つゆくさ。花の形が鶏に似ているから。トツテコッコは鶏の鳴き声の擬音。
- 99 アキザケラ (秋桜) こすもす。秋に似た花が咲くから。
- 100 ネコジャミゼシ (猫三味線) なづな。
- 101 ヒヨコグサ (ひよこ草) はこべら。その姿がひよこに似てかわいいから。
- 102 ラーゾ (宝篋) レンゲ草。
- 103 オシロイバナ (白粉花) 鳳仙花。

(4) 性向

- 104 ホトケサン (仏様) 人のいい人 (ほめ言葉)
- 105 ホテマクイ (火気まくり) ぼうっとしている人。ホテマクイ餅をつくときに、白のなかに蒸した餅米を入れると湯気がまいているのをはらう、藁で作ったもの。
- 106 ウーバンボーズ (大番坊主) ぼうっとしている人。
- 107 ユメゴト シトー (夢のようにしている) ぼうっとしている人のさま。
- 108 ニ下ハッシュ (二斗八升) すこし抜けている人。一俵 (三斗) に二升足らない。
- 109 ガッチャピッキ (片側ピッキ) 意地を張って反抗する人。ピッキは蛙のこと。
- 110 ウカレビュータン (浮かれ瓢箪) 落ち着きのない人。瓢箪が風にゆらゆら揺れるさまに見立てた。
- 111 ボグトンゴター (木刀のようだ) 突っ立っていて役に立たない人。
- 112 ゴマドーラト オチジコ下 (胡麻俵と同じこと) 注意してもすぐ忘れてもとにもどってしまう人。胡麻は束ねてもすぐ元に戻ってしまうから。
- 113 シッキレガンノン (尻切れ観音) 物事を最後までやり遂げない人。  
シッキレ下ンボ (尻切れとんぼ) とも。
- 114 ゾーヒョーガミ (ぞうひょう神) 騒動を起こす張本人。ゾーヒョーは雑用か。  
○ア'ノ ヒター'ー ゾ'ーヒョーガミジャケン'ガ モー ア'ノ ヒト'ン コ  
'ラスギ'ニ ウルゾ'ーシテ イ'カン パイ。(m. S. 4) あの人はゾーヒョーガミだから、もうあの人が来るとうるさくていいかい。
- 115 サラネブイ (皿ねぶり) おべっかを言う人。
- 116 ミャーススツ (売僧する) <動> おべっかをする。
- 117 ワカイチマキ・ワカイチマク (我一巻) 自分の主張ばかりして相手の言い分を聞かないこと。○ワ'ガイチマキ'パツ'カ ユー。(m. S. 4) 自分ばかりが、
- 118 ホーソーキョク (放送局) <新> うわさをまいて歩く人。
- 119 スピーカー <新> うわさをまいて歩く人。
- 120 ネコジンシャク (猫斟酌) 人前で必要以上に遠慮すること。○ソギャン'マ'デ エ'ンリョ'セ'ジ ヨカツバ モ'ー エンリョスルヨーナ 'バア'イ ネコジンシャク 'スン'ナ。(m. S. 4) そんなにまで遠慮しないでいいのを、もう遠慮するようなら、命に遠慮するな(と語)。
- 121 ヒータレ (脾たれ) 気の弱い人。ヒテシボ'とも。
- 122 ヒダリスチガ イー (左綱が要る)・ヒダリスチ イル<動> あつかいにくい人  
馬にのるとき、普通は右綱だけでいいが、扱いにくい馬には左綱も必要だから。

(5) 食生活

- 123 イシガキダゴ (石垣団子) さつま芋をさいころの形に切ってうどん粉にまぜて作るさつま芋の四角な形から。

124 ヘソガシ (麩菓子) 駄菓子的一种。うどん粉で作った菓子で全体の形がへそに似ている。

(6) 動作・様態

125 ハチクソンシコ (鼻糞のほど) 少し。

126 キャーチズイノゴト (嫌われ者のように) ご飯などを茶碗の縁にこすりつけたように。少し。

127 アオビョータン (青瓢箪) ひよろつとした病弱ぎみな人。

128 ホシガンビョーノゴト シト (干し干瓢のようにしている) 痩せている人。

129 ホネゴツツ (骨つう) 痩せすぎているさま、その人。

130 タコツチ (蛸船) 家を建てる時に土台をつき固める (ジガタメ) の作業。タコ (槌) から何本もみんなで引っ張る綱が出ているから。

131 タコンテキエー (蛸の手切り・蛸の手食い) 同じ枠の予算を仲間同士で取り合うこと。蛸が自分の手足を自ら切ったり食ったりすることに譬えた。

132 テビライオ (手平魚) 手の平で叩くこと。

133 ネコンホーカブーイ (猫の頬被り) 約束してもらいたいに逃げ腰になること。猫の頭に袋などを被せると後すざりをする、そのさまに譬えた。

134 チンギリマイ・チンギリミャー (ちんぎり舞い) 忙しいさま。

135 ヤンボロ (山法師) 長く伸ばしたぼさぼさの頭のみ。

136 ヤンボロノゴト シトッ (山法師のようにしている) 長く伸ばしたぼさぼさの頭のみ。

137 ヤンボロインノゴト シテー (山法師犬のようにして) 長く伸ばしたぼさぼさの頭のみ。

138 ワオンノゴト (ライオン?のように) 髪がぼさぼさの頭のみ。

139 ドーコンメノゴト シトー (鼻の目のようにしている) 目がくぼんでいるさま。

140 ゴツカブイノ エンナキャ ハヤーッタゴト (ゴキブリが火の中に入ったように) 仕事などを放っておいて、期限が来てじたばたとあわてるさま。ゴツカブイノ エニ ハヤーッタゴト (ゴキブリが火に入ったように) とも。○イキアタイ'バ ッタ'イ モ ソノヒノ 'クルマデ セージオツテ 'ヨ'。モ'ー ア'ワーテテ 'モ'ー ガサガサガサガサデ'ーシテ。(f. S. 8) 借財はわりも、その日の暮までないでいて、もう、あて、もうがががががして。

141 メンドイノ トキツグーゴト ユー (雌鶏がとき告げるように言う) 村の会合などで女性が意見を言うこと。昔の人が言っていた。

(7) 身体関係

142 ボンクボ (盆のくぼ) 後頭部のくぼみ。

143 テアケボ (手のくぼ) 手の平にできるくぼみ。ここ (テアケボンナキヤー) に漬物などを受けて食べることがある。

144 ホトケサン (仏さま) 瞳の黒い部分 (クロマナコ)。人の姿が映るから。

145 イオノメ・ウオノメ (魚の目)

146 インアケソ (犬の糞) 目の周りにできる腫物、ものもらい。

147 ヒジコーズー (ひじ小僧) ひじ。

148 ヒザコーズー (膝小僧)・ヒザコツツー・ヒザンコツツー 膝。ヒザボンサン (膝坊さん)

(8) その他

- 149 アカハラトシコロリン (赤腹とんころりん) 赤痢。
- 150 イッセンザン (一銭さん) 髪結いさんや床屋さん。
- 151 サエモン (祭文) 浪花節 祭文は祭りの時に神に申し告げる文 (祝詞) のこと。
- 152 ガンズヌ (蟹爪) 熊手 蟹の爪に似ているから。
- 153 ボシケギ (帽子釘) 釘の一種。その形が帽子をかぶっているようだから。
- 154 コーブイガサ (こうもり傘) こうもり傘。
- 155 テン (剣) 鶏などの爪や蜂の針 その鋭さを剣に見立てた。
- 156 チンコロ 女性がするりぼんのような小さな髪飾り。チンコロは小さなかわいい犬のこと。子犬の首輪に見立てたものか。
- 157 ツブムスビ (角結び) 草履。鼻緒の形状から。
- 158 ラムネンタマ (ラムネの玉) ビー玉。ラムネという飲料水の瓶の中にある玉だから。○ラ「ムネンタ」マ 「シュ」ーイ。(m. S. 4) ビー玉はよ。(と語)
- 159 オニカゲ (お荷掛け) 仕事をたのんだりして相手に負担をかけること。  
たのむ時には、○オ「ニカケオ」 イ「タシマ」ス。お礼を言うときには、○オ「ニカケデゴザイマシター」と言う。
- 160 ニオロシ (荷降り) 仕事の大役が済むこと。ねぎらいのことばとして、  
○ニ「オロシデシター」 「ネ」ー。と声をかける。
- 161 カマフタカフセ (釜ふた被せ) 結婚式の時、嫁が婿の家の玄関の敷居をまたぐ時に、釜のふたを嫁の頭の上にかかけて、嫁の心がけについて口上する儀式。

まとめ

- (1) 助動詞「～ゴタル (ようだ)」を用いた多くの直喩の表現が仕立てられている。ここに取り上げたものはそのうちで固定しているものに限っている。こうした盛んな活動を基盤として隠喩・換喩 (提喩) が栄えている。
- (2) 喩材としては身近なものがほとんどである。色、形、動きなど直截的な類似に基づくわかりやすいものが多く、イメージ性の上で喚起力の強いものと言うことができる。
- (3) しかし、その喩材そのものが生活の場から消えると、鮮明なイメージが失われるであろう。また、「もの」はあっても生活のさまが変化することによって、身近なものでなくなった結果、その言い方が用いられなくなっていく。例えば、愚かな人を二斗ハッシュ (二斗八升) ということが人々にすんなりと受け入れられるためには、一俵が三斗であることが周知のことでなければならない。しかし、現在「俵」が単位となることはほとんどなく、斗や升もまた身近なものではなくなっている。となれば、二斗ハッシュの持つ言葉の面白さもまた失われていく。

付記 調査では橋口裕子氏 (広島大学大学院在学) に大変お世話になった。記して御礼を申し上げます。

(いのうえ ひろふみ 大阪教育大学)